

『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮」に参加して

2016年11月30日

2016年11月26日、高知県黒潮町で開催された『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮」(以下「高校生サミット」といいます)総会に自民党国会議員団の一員として参加してきました。高校生サミットは、「世界津波の日」制定の初年度にあたる今年、次世代を担う高校生の防災意識を高めることを目的に、高知県、黒潮町が主催し、政府(内閣府、外務省)、自民党国土強靱化推進本部(本部長:二階俊博自民党幹事長)などが後援して開催されました。

アジア、ASEAN 諸国を中心に29カ国から高校生ら285名が参加しました。国内からも東日本大震災の被災三県をはじめ、東南海地方に位置する県などから高校生ら162名が参加しました。まさに、高校生による国際会議となりました。会議はすべて英語でおこなわれました。

党からは二階俊博本部長、林幹雄幹事長代理、他私を含め7人の国会議員が参加しました。

津波教育や避難訓練など防災施設と一体となった津波防災への備えの重要性、先人の残した教訓の伝承の重要性などをもった宣言文(本文末参照)が採択され高校生サミット総会は閉会しました。

総会の成功を喜ぶとともに、高校生サミットの準備、運営にあたった高知県、黒潮町の皆様方、そして関係者のご努力とご尽力に心から敬意を表します。

高知県を含む南海地方は、隣接する東海地方の沖合の東南海トラフ域を震源とする連動地震、地震によって誘発される津波の発生確立が、かなり高いとされる地域です。特に、高知県の黒潮町では34メートルを超えるきわめて巨大な津波の襲来もあり得るとされる地域で、県と連携しつつ町をあげて防災への取り組みが進められています。

高知県は、地震の震源域が陸地に近いため、地震の発生と津波の到来との時間は、短いところでは10分もないといわれています(東日本大震災では最短で約25分でした)。つまり、逃げる時間が限られるということです。そのため、高知県では、平地では、避難タワーの建設を進めるとともに、背後に小山を抱える地域ではかなりの密度で避難路の設置が進められています。もちろん避難訓練は欠かしません。世界の高校生たちも、こうした取り組みには深い感銘を受けたようでした。

2012年3月に内閣府から東南海で想定される地震、津波の規模が発表された時は、黒潮町の町長はじめ幹部職員は言葉を失ったといえます。津波の高さが、なんと34.4メートルだったからです。あまりの大きさに、あきらめの気分も漂ったといえます。しかし、町民の命をまもることこそ町の使命という決意のもと、町の職員約200名全員が防災担当となつての防災・減災への取り組みが始まり、今へと続いています。

ところで、次の東南海地震、津波の想定をどうするか、首都直下地震の想定をどうするかは、東日本大震災からの復興とあわせ政府の緊急の課題でした。震災発生後の2011年7月、民主党政権のもと東日本大震災復興対策担当大臣とともに防災担当大臣も兼務することになった私は、すぐに、首都直下型地震、東南海地震・津波のこれまでの中央防災会議の想定の見直しを内閣府に指示し、あわせて検討メンバーの一部入れ替えも行いました。

当時、私の頭にあったのは二つでした。ひとつは、中央防災会議によって東北太平洋地域で発生するであろうと想定されていた地震・津波の規模は、地震の強度、津波高さ、震災の起こる範囲、すべてにおいて、3.11に発生した地震、津波を大きく下回るものであったこと。もうひとつは、津波によって犠牲となられた方々の多くは、あらかじめ指定されていた避難場所で被災したことでした。特に、三陸地域では、津波を想定した避難訓練において避難場所とされたところで津波にのみ込まれた例は少なくありません。想定する津波高さが低かったことが、原因ですが、安全と思って避難してきた場所が津波にのみ込まれ、多くの犠牲者が出たことは、痛恨以外のなにものでもありませんでした。

専門家を主体とした見直しチームの始動に当たって、検討を依頼する側の大臣としてひとつの要請をしました。地震、津波においては起こりうる最大規模の想定をしていただきたい、特に津波についてはこのことを強く意識していただきたい、そういう主旨であったと記憶しています。津波にこだわったのは、避難する場所は安全確実な場所にすべきである、という思いからでした。東日本大震災の教訓でもあります。本来、どういう想定をするか自体検討チームにお任せする事項ではありますが、出過ぎを承知でのお願いでした。

しかし、検討の結果でてきた東南海地震・津波想定は、最大規模、といった私にとっても正直言って驚きを禁じえないものでした。最大は黒潮町の34.4メートルでした。「常識」では考えられない高さでした。検討チームの委員にも内閣にもこの新たな想定を公表することに躊躇する向きもあった。あらたな想定がまとまった2012年開けには、私は復興大臣に就任しており、防災担当大臣はずれていました。復興大臣室に報告に来た内閣府の担当職員に、私は次のようにいいました。

「反響はいろんな意味で大きいだろうが、津波の避難が最優先だ。このまま公表すべきだ。」

事実、公表は、黒潮町にとどまらず大きな衝撃をもって迎えられました。風評被害をもたらすとの批判も受けました。

しかし、各地において想定された津波高さは、決してあり得ないものではなく、過去において同レベルの津波が襲ってきたことがあることがわかっている地域も少なくありません。実は、黒潮町でも宝永年間に、30メートル程度の大津波が発生していることがわかっています。

「34メートルの津波と戦う黒潮町」と高らかに宣言し、次の災害に町をあげて備えている状況を見て、少し安心するとともに、巨大な津波が来ることな

いことを切に願わずにはいられませんでした。同時に、大西町長を先頭にした黒潮町の方々の、底抜けの明るさに勇気づけられた高校生サミット参加でした。

「『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮」追記

2016年11月30日

そうそう大事なことを報告しておりませんでした。

高校生サミットには、わが岩手県からも3校の高校生が参加しています。盛岡第一高等学校（生徒4、引率1）、宮古工業高等学校（生徒3、引率2）、水沢高等学校（生徒3、引率1）です。

宮古工業高校は、三陸湾のジオラマ模型をつくり、津波襲来を再現し、津波の脅威を訴えてきた高校です。盛岡一高には、大槌の出身者も参加していました。水沢高校は、私の母校です。昭和48年の卒業です。参加した3名はいずれも私と同じ理数科でした。

高校生サミットの成果をぜひ多くのひとに伝えていただき、また、サミット参加の経験を大事にして飛躍してくださることを期待します。

東日本大震災からの復興は、まだ道半ばです。街並みの再建、生業の復活を加速させるとともに、震災の教訓、経験を残し、伝えていくことを不断のとりくみとして、継続して参りましょう

写真1

高校生サミット参加の高校生の皆さんと。大津波に備えて建設された避難タワーの階段に勢揃いし、記念撮影をしました。



写真 2

外国の大使と懇談する二階幹事長



写真 3

昼食会場にて「かつお」のたたきをいただきました。隣は、福井照衆議院議員です。絶品！



写真 4

安政津波の碑の前にて、黒潮町の大西町長より話を伺いました。安政津波は1854年11月5日（旧暦）に東海地方発生した地震・津波の数時間後、南海地方をおそった地震によって発生した大津波です。四国の太平洋岸に大きな被害をもたらしました。海をへだてた紀州にも津波は押し寄せました。浜口悟陵が機転と行動力によって多く村人を救った逸話は、安政津波の最中の出来事でした。

11月5日が、世界津波の日になったことはご承知の通りです。



写真 5

高校生たちとの交流会でベトナムからの参加者とともに



黒潮宣言

国連総会において「世界津波の日」が制定されたことを記念し、私たちは、世界 30 ヶ国から、2016 年 11 月 25・26 両日、南海トラフ地震による甚大な津波被害が想定される高知県黒潮町に集まりました。

世界各地で自然災害が大きな被害を及ぼし、多くの人々が復興に立ち向かっています。

私たちの住む国や地域は多様であり、発生する自然災害や、防災に対する取組も様々ですが、すべての人々の命を守りたいという願いは同じです。

今日、世界の友と、災害から人々の命を守るために、そして被災地の復興のために、私たちは何をすべきか、また、どのような取組ができるのかを学び合いました。

このサミットを通じて、世界での津波リスクと津波による甚大な影響を認識し、先人たちの防災・減災の志を後世に伝える責務を引き継ぎ、津波災害をはじめとする災害から一人でも多くの尊い命を守るため、できうる限りの努力をする決意をここに宣言します。

1 私たちは学びます。

- 自然災害への理解を深めるため、それらの仕組みや被害、過去の歴史を正しく学びます。
- 人々の命を守るため、防災に役立つ知識や技術・取組を学び、研究します。
- 被災した方々から、私たちはどのように災害に立ち向かい、どのように生きべきなのかを学びます。
- テクノロジーを駆使して学びます。

2 私たちは行動します。

- 自然災害の記憶の風化を防ぎ、防災意識向上のための啓発活動を絶やさず行います。
- 助けられる人から助ける人となる自覚を持ち、人々の心に寄り添うボランティア活動を積極的に行います。
- 防災への取組を地域社会と行政に提案するなど、地域社会の一員として地域づくりに参画します。

3 私たちは創ります。

- 学び得た知識や技術、若者らしい斬新な発想をもって、あらゆる人の防災に役立つ物や仕組みを創造します。
- 世界の友と生きるため、地域や国を越え、共に学び、協力しあう高校生間のネットワークを創出します。
- 次代を担う防災リーダーとして知恵と行動力を発揮し、私たちと未来の子ども達のために、地域の活性化はもとより、災害に強い街や国づくりに貢献します。

そして、自然の恵みを享受し、時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然と共に生きていきます。

2016年11月26日

「世界津波の日」 高校生サミット